

# 「生活」の場の創造性

Creativity of the Place of Living

## 阿部年晴

ABE Toshiharu

はじめに

①「生活」をどう捉えるか

②生活と「習俗」

③人類社会の基層としての「生活の場」

④「後背地」としての生活の場

⑤社会の内的循環

⑥「後背地」の解体?

おわりに

### 【論文要旨】

現代社会においては「生活」や「生活の場」は、ほぼ全面的に国民国家、市場経済、テクノロジーなどの「近代的諸システム」の支配下に組みこまれている。それだけでなく、システムに随伴する近代的専門知やイデオロギー（価値観）の圧倒的な影響下にあり、もっぱらそのような知によって認識され表象される。そのため生活や生活の場が本来備えているはずの性格が顕在化しにくいし認識もされにくい。近代化の過程で、目的や規範を含む生活をかたちづくるべき「生活知」が断片化し曖昧になるとともに、人間と社会にとって本来生活のための手段の体系であるはずの諸システムが巨大化して、いわば一方的に自らの論理に従って社会全体をかたちづくり方向づけるという本末転倒が起こっている。

本稿の目的は、上記の認識を前提として、「近代システム」と「生活」、そして「システムの知（「専門知」）」と「生活知」それぞれの本来的な性格と全体社会における両者の関係を明らかにするために以下の概念装置を提案することにある。

第一、断片化し捉えにくくなっている現代社会の生活を認識するために、近代以前・近代以外の相対的に自律的な地域集団の生活と比較対照するという迂回路を採用する。第二、生活のコアの部分を比較の視点で捉えやすくなるために「習俗」という概念を用いる。第三、生活の場と文明システムの関係を明らかにするために「後背地」という概念を導入する。

【キーワード】生活、生活者、生活の場、生活知、習俗、専門知、システム・組織、都市文明、後背地、地域集団の重層性、近代化